仮借と転注

昔から、漢字の構成については、「六書」ということが言われています。第一章には、四つの方法があると言って、「象形」「指事」「会意」「形声」についてお話ししました。六書というのは、この四つに、「仮借」と「転注」を加えたものです。

象形と指事が基礎になり、会意と形声で、すべての漢字ができ上がったのですが、漢字の使い方の上で、仮借と転注という二つの方法があって、本義とは異なった使い方が行なわれているのです。

仮借とは、^{かり}仮に^か借りるという意味の言葉です。その漢字の意味とは無関係に、発音だけを借りて表わす方法のことです。たとえば、「拾」はひろうという意味の字ですが、数字の十^{じゅう}と同じ発音なので、数字として「拾円」と使うのが仮借です。この方法は、中国では、仏教が伝来した時にたくさん行なわれました。印度の言葉を、漢字の持つ意味に関係なく、表音的に使ったのです。たとえば「南無^{なむ}」という言葉がこれです。今でも、アメリカを「亜米利加」、ドイツ「独逸」、コーヒーを「珈琲」と書くのは仮借です。

転注とは、車が転々ところがって、元の位置から離れていくように、また、川の水が流れ流れて山から遂には海に注^{そそ}ぐように、漢字の本義が転々と変化することを言います。たとえば、「楽」という漢字は、樂で、楽器の象形です。“楽器”が本義ですが、同時に、楽器で演奏される“音楽”という意味にも使われます。ところが、音楽を聞けば、“たのしい”気持になるというので、この楽という漢字で、この気持を表わすことになりました。このように、“楽器” “音楽” “快樂”というように、漢字の意味が転々と変化するのが転注です。

このように、漢字は、文字としては、象形、指事、会意、形声のいずれかで、でき上がっているのですが、実際の用法としては、転注や仮借により本義とは異なった意味で使われている場合がかなりあります。